
あたしは天下のオジョー様！

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしは天下のオジヨー様！

【NNコード】

N9852N

【作者名】

葵

【あらすじ】

あたし、楠木日向！

ちょっとと風紀の悪い学校を仕切つてゐる
世間一般に不良ってヤツ。

あ、そこまでガラ悪くないから。
むしろ正義のヒーローだから！

そんなんあたしだけで、

ひょんなことから世界屈指のオジニー様になる」と云う。

ちゅうと、ちゅうと、ちゅうとー。

あたしの生活がいつまでもちゅうのー！

第1話

いつやほー！
はじめましてー！

あたし楠木日向くすのきひなた！

中学から徒歩5分に住んでる14歳。

ピッチピチの14歳！

あ、2回言っちゃった。

とにかく今日から中学3年生！

もう気合い十分だよ！

制服バシッときまつてるし、気分上がる！

憧れの中3！

ついに、あたしが川中かわちゅうの女王おうおうになー！

説明がまだだつたね。
気分がよすぎて取り乱しちゃつた。

川中つていうのはあたしが通う川崎中学校のこと。
不良が集まつたご近所でも評判の中学校。
奥さまの井戸端会議でもよく出る話題。

よつするに不良の巣窟つてこと。
で、川中は代々中3の女子が支配することになつてゐる。
なぜかはあたしにもわからない。

川中フ不思議の1つ。

解明はされてない！

されてないからフ不思議なのか……。
ちなみに15代まで続いてる。

歴史長いよね。

で、その支配者を「いつ呼ぶ。

女王。

第2話

でね、その由緒ある女王にあたしが選ばれたの！すつじく嬉しい！

だつてあの女王だもん！テンショノ上がる！

今まで長かつた……。

あたしが川中の支配者に！

ほんとダメ。

気分上がりすぎて死んじやう。

学校着く前に死んじやう。

あ、学校が見えてきた。

もうスキップだよ！

空までランニングできれつた気がしてきたよー。空まで行つちやつたらそこは天国だけどね。女王になる前に死んじやうけどね。

ああ、校門が華のゲートに見えてくるー。

ボロボロの校門にとりえ発見！

いつもとはいよねー校門。

なんか廊下が赤い絨毯に見えてきた！落書きだらけだけど、輝いて見える。

こんなに廊下つて素敵だったのね！

「あ、こんちは。楠木さん」

怖そつなお兄ちゃんに頭を下げられる。

ノンノン！

あたしは「女王様」なんだから！

楠木さんなんて呼ばれるのも今日で最後！

そう思うとにやけてくる。

ああ、こんなどこでにやけてたら変人だわ！

メンツ台無しょ！

第3話

「もーすぐねえ」

時計が指すのは8時半。

あとちよつとで女王任命式！

え、授業始まるんじゃないのって?
不良が授業出てるわけないじゃない!
たまに出てるけどや。

あたし、社会だけはできるんだよね。

あ、あと体育と音楽と。

ほかはダメダメだから出る気なし!

廊下を歩いてるとたくさんの人に頭を下げられる。

この崇拜度！

半端ないね。

ほんとにどつかの国の王女みたい！

ま、あたしは川中の王女なんだけどね。

いつもの音楽室へいく。

ここが不良のたまり場になつてゐる。

あー、今日もたまつてますね。

いつも以上にたまつてますね。

あつたり前よね！

だつてあたしの任命式なんだもの。

みーんな来るわよね。

来ないとどうなるかわからないしー。

御苦労さま。

「はーい、田向ひづち来な」

卒業したはずの15代田王女が手招きをする。
任命は元女王がすることになつてゐる。
わざわざ来てくれるんだよね。

ということは来年私がやらなきやいけないのか。
面倒だな。

「はい」

私は壇にあがる。

このボブの茶髪の綺麗なお姉さんが15代目。
いつみても綺麗でうらやましい。
形のいい唇を開く。

「15代田女王、桜がこの者を16代田と認める」

パチパチパチ！

大きな拍手があがつた。

みんなが祝福してくれている！

「あなたの名前は千影よ」

女王は名前では呼ばれることはない。
そんなの、恥になる。

だから、女王は新しい名をもつて。

この人も、桜という名ではない。
あたしの場合には千影。

千影……。

「あたしは千影！あたしが女王よ！」

皆が一同に頭を下げる。

あたしは……16代田女王、千影よ！

第4話

「せつすが、ひな……千影様つー百合^{ゆり}感激です
「せつ？ありがと」

このすつじかわいこ子は木下百合^{きのしたゆり}。
すくなく幼く見えるけど中^{なか}。

そしてこの子も不良。

まったくせつ見えないんだよね。

背は低いし、声は高いし。

でも、不良。

「百合、一生千影様についてこきますー。」「遠慮しちゃいます」

一生ついてくるのは迷惑かも。

なぜかあたしにすつじくなつてこる。

謎だなあ。

ほんとにこれでいいのかな?

あたし、何度も同じことを思つてゐる。

百合、こんなにかわいいのに。

あたしについてきていいの?

間違つてる。

間違つてるよ。

百合は来ちゃいけない。

この世界に来ちゃいけない。

前に聞いたことあつたつけ。

不良でいいのつて。

そしたら田舎は言つたよね。

「これでいいんですね」って。

笑つてた。

でも、すじく悲しそうだった。

問い合わせはしないけどさ。

不良には、いろいろあるから。
あたしだって例外じゃないし。

こういうことって聞いちゃいけないの。
不良の中の暗黙の了解だから。

「ただいまー」

一日終わって家に帰宅。

今日はずっと頭をペコペコ下げられた。
気持ちはいいけど、ずっとつていうのはねえ。
なーんか変な感じ。

初日なんだし、当り前か。

今のうちに気に入られたいって考へてるのかな。

あたしも昔はそうだったし。

女王のお気に入りは、特典いっぱいでからさ。

いろいろと便利。

次期女王も夢じゃなくなるし。

あたしは単純に桜様が好きだったから一緒にいたんだけどね。

「おかえり。で、今飯食べようか」

この男の人はあたしの叔父さん。

お父さんじゃなくて叔父さん。

お母さんの弟なの。

ちなみに名前は幸弘さん。
ゆきひろ

あたしのお母さんとお父さんは5年前に他界した。

不幸な火事だった。

隣の家の人の寝たばこが原因で、あたしの家に燃え移った。
あたしは一人になっちゃった。

そんなときに幸弘叔父さんがあたしを引き取ってくれた。

幸弘叔父さんはまだ結婚していないから、あたしと2人暮らし。

これはこれで満足してる。

叔父さんはあたしが不良なのを知ってる。
知ってるけど止めない。

止められてもやめる気はないけど。
なんでだろーね。

「あ、きんぴらごぼうおいしい！」

「この、ほうれん草もおいしいよ」

見ての通り、裕福とはお世辞にも言えない。
だけど、あたしはこれがいいの。
だって、楽しいもん。
こんなご飯でもおいしいもん。

……すくなくとも、1人になることはないから。
1人ぼっちはもうやだ。
誰かと一緒に暮らしたい。
だからあたしは大満足。

第6話

「おはよー。幸弘叔父さん」
「ああ、おはよー。ひなちゃん」

今日は余裕をもって起きる「」どができた。
いつもは遅刻寸前。

授業にじやないよ。音楽室に。

だから朝ドタバタするのにも幸弘叔父さんは慣れてる。
だけど今日は6時半に起きたから、びっくりしてる。

モー、あたしをなんだと思つてゐるよー

「髪、ボサボサだよ。とかしておいで」

近くにおいてある手鏡であたしの現状を確認。
あー、これはひどい。

惨劇のあとみたいになつてゐる。

大きな鏡のある場所まで行つて、ブラシで丁寧に髪をとかす。
胸下まである焦げ茶の髪がいつもみたいに戻つていいく。
このままなおらなかつたら、どうしようかと思つた。
だつて、これじゃ学校にも行けないよー

あたしも一応髪を染めている。

金髪とかは嫌だから、焦げ茶を選んだ。

ほんとは黒いままでよかつたんだけど、やつぱりそれはね。
不良の威儀が台無しになつかけつからつて言つられて染めたの。
それに、幸弘叔父さんの迷惑にはなりたくないなかつたし。

「こつときまーす」

8時になつたから家を出る。

家の前には百合。

「千影様…おはよつゝぞこます」

「……」

「何でいるの？」

あたし、別に約束してるわけじゃないし。

そもそも百合に住所教えたつけ？

この子、もしかしてストーカー？

「百合、ずっと待つてました」

何分待つてたの？

いつからいたの？！

聞けない……。

怖くて聞けない。

ていうか、待ち伏せの間違えじゃない？

「危険ですから、百合が行きと帰りをご一緒にさせていただきますー」

「御遠慮させていただきます」

……この子、やっぱり危険だわ。

今すぐ警察に……！

「ちよ、ちよっと！」

「おじやーん、お金あるんでしょ？お小遣いちよーだーい」

近くの路地から話し声が聞こえてきた。

「百合、静かにして」

1人で話を進める百合をひとまず黙らせることに成功した。

「ほらー。いつあいあるじゃーん」

路地をそつと覗く。

そこには制服を着た2人の男子学生。

あの制服は……。

「紀乃川中ですね」

いつの間にか横にきていた百合があたしが答えを出す前に言った。

「紀乃川中……。

あそこは、最悪の中学校。

あたしたちの学校と近いけど、仲はものすんぐ悪い。
何かあるたびに喧嘩してる。

だって、本当にあの中学校は最悪。

あたしが女王になつたからにはあの学校はつぶしてやらないといけない。

そう考えてたけど、早くもあいつらと会うことになるなんて。

偶然にもほどがあるわ。

朝から騒動起こして。

ほんつとうに面倒な奴らだわ。

あたしがぎつたんぎつたんにしてやる。

「百合、下がつてなさい」

「いえ、百合が行きます」

下がつてなさいって言つたのに、百合はあの2人の前に躍り出た。
あの子……。あたしの命令を無視したわね。

「なんだあ、お前」

「こいつ、川中じやん」

「へえー結構かわいいし

「じゃ、お前、おれたちと来ないー?」

2人がケラケラ笑う。

ふざけんじやないわよ。

第7話

あんたら、百合をなめてるんじゃないの？

「こーんなにちっちゃくて、かわいくても、百合は喧嘩強いよ。馬鹿にするんじゃないわよ。

「朝からなんですか！？ いちいちめんどくせこことをしてつ。本当に暇人ですね。千影様と百合の邪魔をしないでください。最後の方に変なキーワードを見つけたけど置いておいて。

百合は2人の紀乃川中の男を睨みつける。

結構迫力あるんだよね、こいつの百合って。

「おい、何生意気なこと言つてんだよ」

「後で泣いても知らないからな」

さつきのケラケラ笑いをやめて、百合に殴りかかる。

2人で殴ろうなんて卑怯な奴だわ。

そんなの、百合のハンデにはならないけどね。

「その言葉、そっくりお返します！」

百合は軽く体を右に傾け、相手の拳をよける。

クリーム色で、かたにつくかどうかぐらいの髪がさらりと揺れる。こんなときでもかわいいね、百合は。

百合が鉄拳を顔面にたたきこむ。

2人はその場に崩れ落ちる。

馬鹿だなー。

あんたらみたいなのが百合にかなうはずがないじゃん。

「こりたら学校にさつさと戻つてください」

敵にまでその敬語を止める事はない。

でも、そんな丁寧な言葉づかいが怖い。

恐怖心をあおる。

「ひ、ひいー！」

2人は転がるように逃げて行つた。

あ、本当に転んだ。
相当焦つてるわね。

「千影様！」

百合があたしのところまで戻つてくる。

「あたしの命令ぐらい守りなさい」

「すみません。あんな奴ら、百合で充分だと思つたので……」

しゅんとなる。

そんな顔されたら、許してしまいたくなる。

いつもいつもそう。

あたし、この顔に弱いのよ。

「いいわよ。そんなに気にする必要ないわ」

あたしはあの2人にからまれてた男の人に向つて手を差し出した。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう」

その人は、スーツを着ていて、会社員かなんかだと思つ。ひょろつとしていて、ふちなじの眼鏡をかけている。

「君、名前は？」

「聞くときはそっちから名乗りなさいよ」

失礼ね。

マナーぐらいで守りなさい。

「私は渡辺幸助」

「あたしは千影」

男の人が？マークを頭に浮かべている。

当たり前よね。

千影、としか名乗つてないんだもん。

ふつうは楠木日向つていわないといけないんだけど。
でも、あたしは千影。

「あたしは千影」

もう一度言つ。

この如前を渡辺つていつ男の頭に刻み込むよつて。

「千影様、百合はよるといろがあるので先に行つててください」

学校に着いて、音楽室に向かう途中、百合はなみが
にこやかにあたしの傍を去つて行つた。

嵐みたいな子ね。

あわただしいつたらないわ。

「はやく戻つてきなさいよー」「

廊下をダッシュする百合に向つて手を振つた。

「はいー。すぐ戻りますから」「

ぶんぶんと手を振り返す百合。

手、とれるわよ。

「あ、千影さん」

音楽室の前で待機する1人の不良。

昨日見たスキンヘッドの兄ちゃんじゃない。

名前は……。なんだつけ？

忘れちゃつた。存在感あんまりないからなー。

「原田です。今日、新入生をつれできましたんで」

原田だ。

思い出した。

あ、これじゃ思い出したに入らないかな。

「新入生かあ」

こっちも忘れてた。

新入生の選別やらないと。

うちの不良軍団に入れるかどうかの。

毎年恒例のイベント。

まあ、ほとんど入れちゃつてるけど。

人数多いことにこしたことはないしね。
だから、不良が増える一方。

え？ 卒業するからドラママイゼロだつて？
そんなことないわよ。

あたしたち川崎中学は矢野高校つていう高校と
同盟みたいなのを組んでいる。

実質は主従関係みたいなんだけど。

だから、高校の方に中学の時の不良がにたまつていぐ。
高校じゃ、単位とらないと卒業できないからね。
そのせいで、どんどんたまつていぐの。

「おい、千影さんがきたぞ！」
原田が音楽室の扉を開けた。

第9話

パチパチパチ。

昨日みたいな盛大な拍手が上がる。
あたしは胸を張つて堂々と不良たちの前を通り過ぎ、
用意されてる豪華なソファに座る。
まあ、豪華つてほどじゃないけど。
あたしたち不良にはもつたいないかも。
お、みたことない顔がちらほら。
こいつらが新入生ね。
あー、今年は女が多いわ。
嬉しいけど、戦力にならないと無意味だしな～。

「すみませーん」

甘ーい声がドアのほうから聞こえる。
この声は。

「百合です。遅くなりました」

やつぱり百合。

「で、後ろにいる子は？」

皆が警戒心いっぱいにならみつけているのは、百合の後ろに
隠れてる、誰か。

不良……じゃなさそうね。

「百合の従妹の月夜です。^{つきよ}実はいろいろあって……。

この子もうちに入れてほしいんですよ」

百合は申し訳なさそうにうだなれる。

そつちは後で聞くとして。

あたしが気になつたのは別の方。

「月夜、あたしの隣に座りなさい」

「こっちに来るようになに言つてみる。

ちらりと見えた髪がとつてもきれいだった。
どうな子なのかな？

「は、はい！」

百合の背中からすつと出でてくる。

なんだ、そこまで内氣なわけじやないのね。

「わ、私、みやべつきよ富部月夜といいます」

さらつと、腰まである金髪が揺れた。

染めてるんじやなさそり。

あの金髪は自前ね。

少しウエーブのかかつた髪。

すつじく綺麗。

そして、目。

透き通るよつな青。

海みたいに深いけれど、空みたいに鮮やか。

金髪に青い目。

この子、もしかして……。

「あなた、ハーフかなんか？」

近くまで来た月夜に尋ねてみる。

月夜はビクッと肩を震わせた。

「千影様！ハーフって言つのは禁句……」

「ハーフだなんて言わないでくださいーー！」

百合の静止の声を上回るほどの大声であたしに怒鳴りつけた。

あ、あたし、何か変なこと言つた？

第10話

びっくりした。

心臓が飛び出そうなぐらいびっくりした。

だって、本当に大きな声だつたんだもん。

さつきまでびくびくしてたのに、あんなに怒るなんて思わなかつた。

あの子、不良とは何の関係もなさそう。

見たところ、だけど。

なのに不良のトップを怒鳴りつけるだなんて。

あー、びっくりした。

「おい、女一千影さんになんて口のききかたしてんだ」
そんな声が上がると、たくさんの中から文句が飛んでくる。
さつきまでの勢いはどこへいったのやら。

月夜はまた百合の後ろへと戻つて行つてしまつた。

今度は百合もオロオロしてゐし。
しょーがないわねー。

「うるさいーー静かにしろーー」

あたしが一声あげると、シーンと静まつた。
騒ぎ立てる奴は1人もいない。

王女の特権よね。

私情で黙らせただけいいわよね、それぐらい。

「ちよっとこの子に聞きたいことがあるから。

あー、百合も来なさい」

2人を呼んで、あたしは音楽室からつながらつてゐる準備室の

ドアを開けた。ほこりっぽいなー。

ここは、女王しか入れない特別な部屋となつてゐる。
結構広いし、片付いてる。

あとで、掃除しよう。

ここなら、いろいろ聞けるでしょう。

またなんかあつたら困るし、百合も連れてきた。
これなら大丈夫でしょ。

月夜はやつぱり百合の後ろにいる。

尋常じゃないくらいにあたしを怖がつてゐる。

あたし、変なことした?

あたし何もしてないよね?

なのに、怒鳴られるわ怖がられるわ。

なんだつていうのよ。

ちんぶんかんぶんよ。

「どうちでもいいわ。説明しなさい」
あたしは2人を交互に見た。
とにかく、説明をしてほしかった。
どうにかして理由を聞きたかった。
こんな状態の月夜に説明は無理。
わかつてゐるけど一応言つてみる。

「百合が説明します
やつぱり、百合がやることになった。
ま、これはどうちがしてくれても構わない。
話さえ聞ければね。

「最初に言おうと思つてたことも関係してきます。
千影様もわかつてるでしょうが、月夜はハーフです。
父親は日本人ですが、母はヨーロッパ系なんです」

ヨーロッパ系か。

それで金髪に青い目なのね。

「月夜の母は月夜が7歳の時、借金を残して家を出たそうですが

その瞬間、月夜の顔が曇つた。
嫌なんだ。この話をしてほしくないんだ。
だけども、月夜は止めない。

「母がないことや、金髪に青い目のことなどで
月夜は学校でいじめられてたんですね」

ああ、もうダメだ。月夜は限界だ。

身体が震える。

思い出しちゃったんだね。

青い目がよどんでいい。

白い肌がどんどんと青ざめていく。

「それからいろいろあって……。

それで、ここでかくまつてほしいんです」

なるほどね。

だいたい予想はできた。

金髪。

中学校に入つたらきっといじめはひびくなる。

当たり前だよね。

それで、川中で勢力をふるう不良軍団に入れでほしいうつてか。ここに入つたら、いじめなんてなくなる。

あたしたちにはむかえばどうなるか知つてゐるし。

それに、川中を守つてるのはあたしたちだもの。はむかう、なんて選択肢、この学校のやつらにはない。

「百合、こいつたん出て行きなさい」

あたしはひとまず百合を部屋から出す。

2人で話したかった。

だいたいのことは聞いたし、席を外してもいい。

「で、月夜。あんたまだいいたいことあるんじゃないの？」

わざわざからあたしに訴えかけるような視線。

言わせて、あたしにはそつ聞こえた。
まだ、この子は秘密をもつてゐる。

「わ、私……」

月夜は小さな声で呟くよひに言った。

第1-2話

「私、百合姉に嘘……ついてます」

百合姉ゆりねえって百合のことよね？」

確か、月夜つて百合の従妹なんでしょう？

事情も知ってるっぽい百合に嘘をつくる必要なんてあるの？

「母は、借金で夜逃げしたんじゃないんです」

でも、百合はそう言つてた。

違うなら、何なの？

「母は父からの暴力で……。それに耐えられなくて家から逃げたんです」

家庭内暴力つてこと？！

でも、お母さんがいなくなつたつてことは……。

「次は私でした。母の次は、私でした」

すっと制服の袖をまくった。

そこには痛々しい痣が。

「私、もう……」

月夜の頬に涙が伝う。

それは止まらない。

どんどんとあふれ出でてくる。

「 プチッと何かが切れた。」

「 ああ、堪忍袋の緒かな？」

「 でも確かにプチッと聞こえた。」

「 アニメや漫画みたいじゃない。」

「 プチッだなんて。」

「 あたしは、今かなり気分が悪い。放つておけるわけないじゃない。」

「 こんな月夜、放つておけないじゃない。」

「 そんなバカでアホでクズな父親、放つておけるわけないじゃない。」

「 ……あたしが」

「 ……？」

涙を流しながらもあたしの話に耳を傾ける。

次の言葉を待つ月夜。

「 あたしが月夜を守る」

「 あたし、頭にきた。」

「 あたしはそんなに賢くない。」

「 ムカつくやつは殴り飛ばさないと『気がすまない』。」

「 このままじゃ、月夜が壊れちゃう。」

「 月夜は、もう駄目だ。」

「 もう、我慢の限界まで来てる。」

「 だから、あたしが殴つてやる。」

「 月夜の気持ちをぶつけてやるー。」

「 あ、りがと……『ゼロ』、ます……」

「 泣きじやくじながらもお礼を言ひつい。」

「 ほら」

あたしはポケットからハンカチを出して渡す。
このまま泣いているわけにもいかない。

「ありがとうございます」

涙を拭いた月夜はにつこりと笑つた。

「それでいい」

あたしも笑い返す。

そうよ、月夜には涙より笑顔のほうが似合つ。
とってもかわいいよ、月夜。

第13話

それから1週間。

今年の春は大きな出来事がいくつもあった。

まず、不良でもない月夜が不良軍団に入つたこと。

かなりイヤそうだったが、みんな一応認めてくれた。
といふか認めさせた。

はじめはすぐきしゃくしてたけど、今は違う。
かなり打ち解けて、すころくとかで遊んでる。

よかつたよかつた。

月夜も楽しそうだし。

もちろん不良軍団もエンジョイしてる。

それから、不良軍団の中で月夜は勉強を教えたりしてる。
もう少し勉強はしないと、ということらしい。
わかりやすくて、内容もおもしろい。
あたしもしつかりおしえてもらってる。

月夜、いい先生になれそう。

生徒は不良たちだけね。

とっても平和な毎日。

暇だけど、すつごく楽しい。

不良たちとばか騒ぎするのがこんなに楽しいなんて。
全然気付かなかつた。

最近はコントにハマつてるの。

誰かが提案してコント大会。

あれ、ものすゞ面白いイベントだね。
お腹痛くなっちゃった。

「一んな感じで毎日を過ごしてた。

これからもずっとこんな風に過ごしていくんだな。

そう思つてた。

だけど。

だけども神様はやさせてくれなかつた。

あたしの生活をむりやへひやへしたのは1通の手紙だつた。

「たつだいまー」

あたしは帰宅して玄関で靴を脱いでいた。
でも、おかしい。

いつもは幸弘叔父さんが玄関まで来てくれるのに。
出かけてるのかなつて思つたけど、違うみたい。
靴があるし。

それに車もあるし。

「変なのー」

あたしは部屋にバックを置いてリビングへ行く。
制服のままだけじいか。

「たつだいまー」

あ、いたいた。

幸弘叔父さん、いるじゃないの。
ちよつと焦つたわ。

何かあつたのかと思つて焦つたわ。

完全にあたしの勘違い。

幸弘叔父さんは紙を見てうんうん唸っていた。

「おーい

あたしが前にあるイスに座つても全く気付かない。いつたいどうしたのよ。

「ねえ、幸弘叔父さんつてば」

肩をぶんぶんと揺わふる。

「ああ、ひなちゃん。おかげり」

さつきまで見てた紙をさっと隠した。

あたしに見られたらまずこの？

「さつき何見てたの？」

あたしが聞くと

「い、いや。何でもないよ」

と、うろたえだした。

もひ、何だって言ひのよ。

「絶対見てた！みーセーテー！」

あたしは幸弘叔父さんから手紙をヒョイッと取り上げ書かれている内容にぱーと目を通す。

「ひ、ひなちゃん……」

あたしの目が途中で止まつた。

「な、何よ、これ」

読まない方がいい、そう止める幸弘叔父さんを無視して読み続ける。

「……」

最後まで読んだ。

読んでしまつた。

悪魔の手紙を。

何で？

あたし、何で見ちゃつたの？

幸弘叔父さんが止めてくれたのに。

あたしの波乱の中の生活をこの一通の手紙が招いてしまった。

第14話

楠木　日向　様

いきなりのお手紙申し訳ございません。

あなたも戸惑つていることでしょう。

私は渡辺幸助。覚えてますか？

あのとき、あなたに助けてもらつた者です。

私はあのときの恩返しがしたいと思い、お手紙を送りました。
私が勝手に調べさせてもらつたところ、日向さんは
経済状況が良くないということが判明いたしました。

そこで提案です。私の家に養子としてきませんか？

田向さんをえよろしければ、私の家に養子としてきませんか？

嫌ならお断りください。

私は恩返しがしたいだけなのです。

嫌がることを強要はさせません。

いい返事をお待ちしています。

渡辺財閥社長　渡辺幸助

何よ、何よこれ。
どうこいつこと？

意味わかんないよ。

渡辺幸助。

この名前は覚えてる。

ちょっと前にあたしが紀乃川中のバカたちから助けた男。
あの、サラリーマンみたいな男。

渡辺財閥。

あたしみたいな不良でも知ってる大きな会社。
いろんなことをやってるし、有名。

あの人、渡辺財閥の社長だったの！？
まったくわからなかつた……。

そんなこと、どうでもいい。
どうでもいいよ。

それより重要なこと。

……養子。

あたしがある人の養子に……？
養子として引き取りたいって？

そんな……。
そんなの……嫌。

嫌だ。

あたし、このままがいい。
お金持ちの家になんて行きたくない。
あたし、普通な生活で言い。

貧乏でいいからそのままがいい！

「……ひなちゃん。僕もこんな話変だと思つたんだ。
そしたら電話がかかってきてね。ここに書いてることと
おんなじこと言われたよ。いつのまにかこんな人とかかわってたん
だね」

「じゃあなんさー……」

「謝ることはないよ。僕は怒つてるんじゃないんだ。
手紙にもあつたけど、僕の家は貧乏だ。
いつもすれすれ。何とかやつていけてる状態なんだ。
ひなちゃんが行きたくないって言つなら、僕はそれでいいよ。
だけどね、やつぱり……」

「……」

幸弘叔父さんは、養子に入つた方がいいと迷つんだね。
うん、構わないよ。
これが、幸弘叔父さんのためになるなら。
言いたいことはわかるよ。
もう、私を養つてくことは難しいんだね。
わかるよ。言わなくつたつてわかるよ。
だって、幸弘叔父さん顔にでやすいもん。

でもね。でも本当は嫌なんだ。
普通でいたいんだ。

だけどこれが幸弘叔父さんへの恩返しになるなり。

あたしの気持ちを伝えられるなら。
ありがとう、のかわりになるなら。
あたし、それでも構わないよ。

「あたし、行くよ」

決めた。

あたしは養子に行く。
もう、普通に戻れなくて。
普通じゃなくなつても。

あたしは行くよ。

「……いいのかい？」

「いいよ。あたしは気にしてないから」

気にしてなんかないよ。
別にいいよ。

むしろ、感謝してるよ。
今までありがとうございました。
次はあたしの番。
あたしがお礼をしなきゃいけない。
だから、行くよ。

「わかつてるよ。言いたいことはわかつてるよ」

「……」

幸弘叔父さんは何もしゃべらない。
何も言わなくともわかつてゐる。
あたし、わかつてゐかる。
だから大丈夫だよ。
あたしは平氣だよ。

心配しないでよ。

あたしは女王よー。

……そうだ。

あたしは女王だ。

川中の監をどうすればいいの?

どうしようつ。

養子となつたら転校しないといけないよね。

じゃあ、川中はどうなるの?

女王はどうなるの?

あたしはめづらすればいいの?

だけど、あたしは行かなきや。

優先しなきや いけなことがあるから。
ごめんね。

あなたたちは大事だけど、一番じゃない。

もう、はつきりと順位がついてしまってるから。
あたしがやらないといけなことじゅないから。
変わりはいくらでもいるから。
だから「めんね

「これでほんと終わったかな」

あたしは部屋をぐるっと見回した。

あたしの大切なものを机から取り出してダンボールに入れた。
もちろん、全部持つて行きたいけど、迷惑になりそうだし。
だから、選ぶことにした。

あたしのアクセサリー、あたしのぬいぐるみ。
ダンボールにそつと詰め込んだ。

少し前に、渡辺さんに電話した。
渡辺って呼び捨てにするのもどうかと思つて「やん」をつけないと
にした。

これなりいよね。

手紙の中には名刺みたいなのが挟んであって、電話番号もあった。
それを見て電話をかけた。

YESの返事をするために。

その次の日、渡辺さんが訪ねてきた。
細かい説明とかするために。

あたしが養子に行くのは1週間後になった。

1ヶ月ぐらいがいいのでは、と渡辺さんは言つたけど却下。
だって決心が鈍る。

行きたくないって思つてしまつ。

だから、早いうちに行きたかった。

あたしが選んだのは、1週間だった。

残り、3日。

あと3日であたしはこの街からいなくなる。
残されたのは3日間だけ。

わあ、そろそろ学校に行かないと。
また遅刻しちゃう。

あの鬼センセーもみられなくなるのか……。
わざと遅刻しちゃおうかな。

悔いのないようこじとかなきや。
時間は巻き戻せないんだから。

そういえば、百合にあのペン返しておかなきや。
月夜にあげよひと思つて買った髪留め、渡していない。

やるけどがいっぽーあるね。
今のうちにあわらさないと。
あとは何が残つてゐかな?

「千影様。最近元気がないです。どうなさいたんですか？」

昼休憩、外で幸弘叔父さんが作ってくれたお弁当をつづいている真っ最中、百合は唐突に聞いてきた。

「そんなことないわよ」

あたしは笑ってみた。

それでも百合は心配そうな顔をする。

「私もそう思います」

あたしの右でサンドイッチにかぶりついていた月夜も口を出す。

あらやだ。なんでわかつたの？
もしや、バレバレ？！

エスパーか。
エスパーなのか？！

「違うわよ。最近寝不足なだけ」

あたしは卵焼きを口に放り込んだ。

幸弘叔父さん特製の卵焼き。

これも食べられなくなるのかあ。

残念だな。

あたしはみんなにはギリギリまで言わなことにしてた。

転校のこと。

結局あたしはお嬢様学校「桜ヶ丘女子中学校」つていひといひに
転校することになった。

みんな知ってる有名な学校。

春だし、区切りもまあまあいいしね。

わかつてはいたけど、息苦しそうなところ。

ここがいいな。

ここにいたいな。

でも、それは叶わないんだよね。

あたしが決めたことなのに。

どうしてこんなにも苦しくなるの？

「これ、どうぞ。髪止めのお返しです」

月夜は紙袋をあたしに差し出した。

ああ、前にあたしがプレゼントしたやつか。

今日は付けてないけど、いつもつけてくれる。

「開けていい?」

月夜がうなずいたのを確認して、紙袋を開ける。
丁寧にシールをはがして中身を取り出す。

この感触は……。

「ハンカチ?」

予想通り。ハンカチだつた。

紫色で、端には黒猫のシルエットの刺?
白いレースがついたかわいいハンカチ。

月夜らしい趣味……。

でも、すっごく嬉しい!

「ありがとう!月夜。大事にするわ
「私も髪留め、大切に使っています」

月夜はにっこり笑う。

ホント、美人だな。
うらやましすぎるんだけど。

百合も百合でめちゃくちゃかわいいし。

従姉妹つて似るんだねえ。

仲もいいみたいだし。

いいなあ。

従姉妹つて。

「そりそろ、音楽室へ行きましょうか」

「わづね」

百合は弁当箱を風呂敷で包み立ち上がった。
月夜もたつて制服をただす。

「私は放課後行きますね」

百合とあたしは音楽室へ。

月夜は自分の教室へと向かつた。

月夜もさすがに授業をさばむのは一矢うし。

ま、不良つてわけじやないしね。

そう考えるのも当たり前か。

音楽してのんはやつぱくべくさー。
換気ぐらこしなさこよ。

「あ、すんません」

あたしが窓を開けていると、原田が手伝ってくれた。
原田は気がきくし、いいやつだと思つ。

「もうすぐかあ」

あたしは窓から身を乗り出して呟く。

……もうすぐ、だ。

どうやって切り出そうか。

転校のこと。

それとも、言わずに行こうか。

何も言わずに行こうか。

次の日からドロン。

それもいいかもね。

言わなくてもいいんだし。

あたしにはそれが一番いいような気さえしてきていた。
そう、何も言わずに一人で行くの。

いいじゃない、それで。

第1-9話

「みんな、よーく聞きたかったーーー。一回しか言わないから
ちやんと聞きなさいよ。何があつても聞き取るのよ」

あれから2日後。

つまりは、明日あたしは養子に行く。
この学校で過ごす最後の日。

もうすぐ6時。

皆が帰りの用意を始めたといふ、あたしは話を切り出した。

みんなをじりじり注目させる。
よし、全員じつち見たな。

ちやんと黙つていた。

みんなちやんと黙つていたの。

転校のこと。

言わずに済んであたしらしくない。

みんなだつときつと怒る。

だから、黙つておくれとしたの。

みんな驚くだるくな。

「あたし、転校することになったの」

シーンと静まり返った音楽室。

あたしは余裕を見せつかむかのように話しだす。

「だから、女王の座は降りさせてもらひやつ

目を見開いてあたしを見る。

煙草の灰をポロッと落とす不良たち。
ほんと面白いわね。

「あたしが次の女王を決めさせてもらひやつ

誰も、何も言わない。

あたしの言葉を待っている。

あたしにはそう見えるから話を続ける。

「次の女王は……」

あたしはあの子を指差した。

すっごく驚いた顔をしている。

驚いた、なんてレベルじゃない。

そりゃそうよね。

あたしがいきなり話を進めていくんだもの。

だけど、事実なのよ。

驚かないでちようだい。

あたし、もう決めちゃつたんだから。

何を言われても、戻る気はないんだから。

だから、あなたもいつもみたいにかわいく笑いなさいよ。

最後にあなたの笑顔を見せてよ。

それだけであたしは頑張れるんだから。

第20話

「田舎、あんたが女王よ」

もつ一度言へ。

百合は固まっている。

ピクリとも動かない。

ほかの子も同じ。みんな全然動かない。

そんなにびっくりしたんだ。

「やつこつ」とだから。あたしは明日から学校来ないからね。ちやんと田舎の言へこと聞くのよ。じゃ、わよつなり

早口でまくしたてるように言ひて、音楽室を出た。

ダメだ。ここにいちゃいけない気がする。さつきまで全然大丈夫だったのに。

なんだか、苦しい。すごく、苦しい。

何で？これでいいはずなのに。昨日練習したとおりに言えたのに。なのに何で？わかんないよ。

早く、早くここから離れなこと。

理由は分からない。だけど、早くいかなきや。

ここにいたらだめ。あたしの直感が告げている。頭で警報が鳴っている。早く、早くいかなきや。ここから遠ざかないと。

あたしの何かがおかしくなっちゃう。だから……。

「千影様！」

百合の声が遠くに聞こえた。追いかけてきたんだ。

でもあたしは振り返らない。無視を決め込む。振り向いたらダメ。帰らないと。あたしのいる場所はここにはないんだから。

「待つてくださいー！千影様！」

待つてって言われて待つ奴なんていないわよ。
待つわけないじゃないのよ。あたし、ここにいたくない。
でも、足音は近づいてくる。どんどん、近づいてくる。
百合は走つてくる。猛スピードで近づいてくる。
逃げればよかつた。あたしも走ればよかつた。
だけど、それはとてもいけないことのように思えて。
立ち止まる。でも、振り向かない。前を見たまま立ち止まる。

「千影様！」

後ろからガバッと抱きつかれる。
ぎゅうっと強くあたしを押ししつぶすかのよつに力を込める。
痛いよ。痛いよ、百合。

「千影様。嘘ですよね？あれは冗談ですよねー？」

大声であたしに問いかける。

答えぐらいわかってるくせに。もう一度言つてあげる。よーく、聞
きなさい。

「嘘なわけないでしょ。あたしはこの街を出でていく。だから百合、
さよなら」

一気に力が緩む。それでも百合は離さない。

「百合は信じません！千影様は嘘をついているんですね！」「また腕に力が入る。だから、痛いってば。

「百合」

あたしは静かに百合の手を離し、今度はあたしが百合を抱きしめた。暖かい。百合は暖かいね。あたしはこんなにも冷たい。心が冷たい。いつも付いてくれたのに。なのに、こんなことしかしてあげられなかつた。

あたし、バカだよね。百合の一年ちょっとを 無茶苦茶にした。無茶苦茶になつたのはあたしの人生だけじゃない。百合も同じ。あたし、百合を傷つけた。あたしづか、かわいそぶつて。世界一のバカだよね。

「あたしのこと、好き？」

「もちろんです！百合は千影様のこと、大好きです！」

すぐに返事をしてくれる。当たり前のようになり百合。
こんな「当たり前」を作つてしまつたのはまぎれもなくあたし。
悪いのはあたし。百合は全然悪くない。だから、そんな悲しそうな
顔しないで。

全部、あたしが悪いの。

「あたしのこと、好きでいてくれるなら。慕ってくれるなら。
……あたしのこと、追わないで」

自分でも信じられないくらい鋭い声を出していた。針のように尖つた声。

触ると痛い、薔薇のとげのよつ。

「田舎があたしのためであります」と。それはあたしを笑って見送る
ことよ

「寂しくなつたらあたしに電話をかけねばいい。あたし、出るから。
あたしが一番求めているのはそれなの。お願い、わかつて。

「寂しくなつたらあたしに電話をかけねばいい。あたし、出るから。
百合の話聞いてあげるから。……だからあたしを追わないで

ほかの」となら向でもするから。できる」となら向でもやるから。

「それに、あたしはもつ、「千影様」じゃない。田舎よ」

その名前はあたしに必要なこと。あたしが持つべき名前じゃない。

「あたしからのプレゼント。あなたの名前は「雪姫」。雪姫よ」

あたしでできるのませぐらい。あたしが名前をあげる。
受け取つてほし。あたしのわがままを聞いてほし。

「もう一つ。田舎、引き出しの中をのぞいていらっしゃる

音楽準備室にある机の引出し。あそこには不良たち一人一人にあて
た手紙がある。

昨日、こいつをり入れておいた。女王のあなたなら、どこの引出しか
分かるはずよ。

だから、見つけてみんなに渡してあげて。あたしの気持ちだから。

「もう、話すこと終わり。もう向こも残つてない。

最後に言つておきたこのは……

「田川じゅばを切る。あたしが伝えたいこと。

転校が決まってからずっと百合に伝えたかったこと。

「……」「めぐね。こんなあたしを許して。本当に」「めぐね……」

百合の頬に涙が伝うのがちらつと見えた。

それを確認したあたしは、百合を力強く突き飛ばした。
よろける百合。あたしは走り出す。

最後の最後まで「めん、百合。」「めん、」「めん、」「めん。
謝りたい。謝りたい」といつぱいある。
ごめんって何度も言つても足りないぐらいある。

泣き崩れる百合。

あたしにはゆりを慰めることができない。

「めぐね、百合。

ありがと、百合。

さみつながら、百合。

第20話（後書き）

なんだか今回だけすゞぐ長くなつてしましました。
ごめんなさい！

今まで読んでくださった皆様！

改めて、お礼を申し上げます。

こんな葵ですが、頑張りますので応援してください。

第21話

「これで全部かな？」

幸弘叔父さんはあたしを振り返った。

田の前にはすゞぐ高そうな車。そこにあたしの荷物を積み込んでいく。

結構あつたけど、どんどん中に入つていぐ。この車、四次元ポケット？

はじめは、持つていく予定の荷物は少なかつた。

迷惑になつたら嫌だし。捨てようと思つていたのもあつた。そしたら渡辺さんが「別にいいよ。いっぱい持つておいで」と言つてくれたから、それに甘えることにした。そしたら荷物は段ボール5個分！自分でもびっくりした。ぬいぐるみとかが多いからね。

かさばるんだろうな。捨てられなくて困つたし、よかつた。

「幸弘叔父さん」

「何だい？」

やわらかい笑みを浮かべながら聞き返す幸弘叔父さん。

改めて思つたんだけど、童顔だなあ。子供みたいよ。幸弘叔父さんらしいけど。

「また、幸弘叔父さん特製の卵焼き、食べに来ていいかな？」

あたしがどんなに頑張つてもマネすることができないあの味。あたしの大好物。

あれが食べられなくなるのは本当にショックなのよね。また、食べたいあの卵焼き。

あつどいんな高級店でも作れない、幸弘叔父さんの卵焼き。

「 もうひる。こつでもおこで」

「 うそ、落ち着いたら食べにくる！」

楽しみだなあ。早く食べたいよ。ていうか、お弁当箱の中身、全部

それでもいいよ。

絶対に飽きない！変な自信まである。

「 そろそろ行こうか、田向ちゃん」

「 はー」

渡辺さんが車に乗り込んだ。あたしもそれに続く。

幸弘叔父さんが手を大きく振ってくれている。あたしも振り返す。

ついに車が発進した。

見えなくなる家。

見えなくなるいつもの景色。

見えなくなる幸弘叔父さん。

もつ戾らない、あたしの口調。

バイバイ。

「 わあ、っこたよ」

運転手さんには車のドアを開けてもらいつつ外に出る。
専属の運転手さんなのかな? たぶんやつだよね。アリマとかでよく
見るじゅん。
かっこいいなー。

「 呼び方、田向ひやんでいいかな? ひなちゃん、でもいいけど
「 田向ひやん、でいいです」

ひなちゃんなんて呼ばれたひょこ田向ひやん。思って出したく
なんかないよ。
だから、田向でこよ。本音は「 ひやん」 もこりないんだけどね。

「あたしはなんて呼べばいいですか？」

やつぱり渡辺さんは駄目だよね。

一応、親子になつたんだから。その関係は本物じゃなくとも親子なんだから。

「お父さん、は呼びづらうだらうしね……。渡辺さんでいいよ。
だけど、パーティーのときはお父さんって呼んでもらえると助かる
んだけど……」

「わかりました」

ひえー！パーティーなんかあるんだ。あたしも参加しないといけないんだよね。
ドレスとか着るの？！無理無理！絶対似合わない！

「よつこわ、渡辺家へ！」

渡辺さんはとてつもなく大きくて豪華な扉を開けた。
あたしは一步足を踏み出した。

これで、あたしは本当に渡辺家のオジヨー様になつちゃうんだ。

バイバイ、あたしの平和な日々。
バイバイ、あたしの日常。

バイバイ、みんな。

真つ赤な絨毯が敷かれたすんごく広い廊下をあたしは歩きだした。

「はじめまして、お嬢様」

「……はじめまして」

どうこう状況が説明しよう。

びつじてあたしがこんな広い部屋の中で正座しているか。

それは、少し前にさかのぼる。

「田向ちやん。田向ちやんにも一応マナーとか勉強してもらわないと
いけないから専属の者をつかせせてもらいたいんだけど、いいかな
?」

リビングで、ここにこりソーランツーリベルジヤなごくらに広い
リビングで
お茶を入れてもらつてくつろごどごるとも、渡辺さんは尋ねてきた。
やつぱり渡辺さんはひょくつとしている。こんな豪邸は似合わないかも。

失礼だから口には出れないけどね。

「はい。別にいいですけど。どんな人なんですか?」

気になるのは、その専属の者って人。

厳しいおばさんとかだったら嫌だなあ。

「ひ、ムチでビシビシ叩かれてさ。痣だらけになっちゃうよー。」

「紹介したいから、部屋を移動しようか。そうだね……。」

「田向ひやんのお部屋にじょうか。ついでに部屋も見せたかったしね」

あたしの部屋かー。そういうえば荷物は運び込まれたらしいから、ぬいぐるみの

セッティングもしなきゃ。ああ、あと風水グッズも。

あたし、占いは信じる派なんだよね。風水とかすごく気にしてる。ちなみに、部屋もその影響のため、方角を注文しておいた。嫌な顔せず変更してくれた渡辺さん。すうごくいい人だと思つ。

「ヒヒだよ。どうや?」

渡辺さんがドアを開けてくれる。あたしは中に入った。

ペコリ。

お辞儀をしている2人の人が奥にいる。

2人とも綺麗なお辞儀。45度ぴったりだよ。角度測りたいんですけど。

でっかいやつ特注してもらつても。

「田向ひやん、ヒヒ座つて」

椅子を引いて示しているから、あたしはその、一目でわかるほど高そうな椅子に座つた。うわ、すわり心地よさすぎー。こんないい椅子見たことないんですけど。ホントいい。

ああ、そんなことよりこの人たちのほうが重要よ！

そこにいるのは顔のそっくりな女の子2人。

1人はふわふわの髪をツインテールにしていて、シュシュをつけている。

目がくりつとしていて、これまた美少女。それにしても、髪長いね。ツインテールつてことは、髪を20センチほどあげてるわけでしょ。なのに腰ぐらいまである。

もう一人は、髪をお団子にした子。

さつきのことおんなじ顔だから、言つまでもなく美人。

横髪だけを垂らしている。中華風な感じだ。こっちの子も腰ぐらいまでの髪。

すつきりとした顔。すっと通った鼻。クールな女の子。

あたしと年も変わらなさそう。

で、あたしが一番驚いたこと。

それはね、この2人がメイド服着ていること。

ちょっと…メイド服よ！着ている人ははじめてみたんだけど…なんか妙に感動してきたんだけど！

だってさ、メイド服だよ？普通着ている人なんていないよ。

しかもこれ、コスプレとかじゃないと思う。たぶん、本物のメイドさん。

こんな家だもん、メイドがいててもそれほど不思議じゃない。でも、メイド服にはびっくりだよ！

「ははは、はじぬまして！」

あたしは椅子の上でペシックと正座した。

そうして、今の状況が完成したわけだ。

「私はそろそろ仕事をしないと……。すまないけど口回りちゃんを頼むよ」

渡辺さんは腕時計を見ると急にあわてだして部屋を飛び出して行った。

めちゃくちゃ速かった。マッハだった。嵐みたいな人だよ。

ちょっと待て。

……あたし、取り残されちゃった？

誰かも知らない人2人の部屋に取り残されちゃつたって？
おーい！やめるー！氣まずいだろー！どうやってこの状況を打破しろって？！

ドラクエのラスボスなみに難しいわ！あれ、何でドラクエ？

「あああ、あの」

「面白い人ですねー。自己紹介とかしませんか？」

テンパッてるあたしを普通に受け流したあんたが面白いよ。
自己紹介…[れなら]の氣まずい空気を何とかできる…

「はいはい。やつましょやりましょ！」

なぜか2回繰り返すあたし。もー！

「じゃあ、私からしますねー。まずはお前ですね
そこら辺にあつた高級椅子の上に立つふわふわツインテールの女子。

高級そうな椅子の上に立つだなんて！何者だ？！

そもそもどうして高級な椅子がそこいら辺にあるの？おかしくない？

「わたし、田比野ありす《ひびのあつす》って言こます。次、ありますね。

中華風お団子の女の子を椅子の上に立たせる。てこつか、もう名前言つやがりますよ。

「……田比野あつす《ひびのあつす》」

あつた時から思つてたんだけど、あつすは無口なんだね。だって、声も小さめだし、ありすみたいに元気少女つて感じじゃないし。

「回じゆずくへもしかして双子？顔も名前も似てるし」

考えたことはすぐ口に出す。あたしの性格上そうしかできない。秘密は守るけどね。本当にって疑われるけど。

「はー、やうです」

ついひとつ笑つあつす。わつきかひくへんじしてゐる。嬉しいことでもあつたのかな？

反対にあつすは笑つてない。まつたく笑つてない。無口な面でもそつだけど、おとなしいのかも。あたしと正反対だ。

「次はあたしだね」

あたしは自分を指差す。2人ともやつたんだから必然的にあたしの番。

高級椅子には立てない……。なにか代用品を……。
お、いいの見つけた。

「お、お嬢様！危ないです！」

あたしがその代用品に立つたら、ありすはすゞい剣幕で降ろしにかかりました。

えー、いいと思つたんだけどなあ。

「段ボールの上になんて立たないでくださいー危ないですー！」

あたしの見つけた代用品とは段ボールだ。ありすに却下されたけど。あつむ、後ろの方でぼそつと一言。

「…………面白い人」

あつむにも面白い人発言されちゃいました。

あつむに言わると否定できない……。なんでもできひやいそうだし。

勉強とか得意そう。あ、スポーツもできたりして。

「こんな高そうな椅子の上になんか立てないよ
「なら床でいいですよー。」

一度と段ボールの上で血口紹介をしません、という変な約束をさせられた。

もつこないってばーそんな約束させられてたら身がもたないわよー。

「えーと、あたしは、くすの……、渡辺口向」

……あたしはもつ楠木田向じゃなかつたんだつた。

あたしは渡辺口向。渡辺、だ。

「別にお嬢様なんて呼ばなくてもいいよ。2人とも歳は?」

「14歳」

「……14歳」

2人できれいにハモッた。さすがは双子。息ぴったり。

「あたしも14歳。おんなじ歳なんだから敬語なんて必要ないよ」

あたし、はつきつ言つてお嬢様なんてガラじやないしね。
この2人のほうがお嬢様らしい。あたしがぴらぴらしたドレス似合
うと思うか?!

そりやあ、似合つたら嬉しいけどさ。おーほつほつほなんていて
みたいけどさ!

無理でしょ。どう考へてもやつちやいけないでしょー

「敬語はやめることはできませんよ」

「……私たちは雇われの身」

でもさ。あたしはお嬢様なんかじゃないよ。

「田向お嬢様なんてどうですか?」

「……これなら大丈夫」

「はあ。まあいいわ。『一かく』
お嬢様、よりはいいしね。親近感がわく。

「じゃ、血口紹介の続きやるーー。」

知つておきたい。あたしの「専属の者」の2人について。
これから長い付き合いになるから。だから、いっぱい知つておきたい。

2人とは、主従関係なんかじゃなくて、友達として付き合いたいから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9852z/>

あたしは天下のオジョー様！

2012年1月8日20時52分発行